

留年と休学を減らす取り組みと提案

研究員 東郷裕・間中和歌江



武蔵野大学では他大学同様、1年生から2年生に進級する際、毎年それなりの数の留年生と休学生が出る。もちろん理由は様々ではあるが、INITIAL 英語基礎クラス（1年生必修授業）を担当する間中和歌江先生と私は、これらの学生の中でも出席不良によって単位取得ができない学生に着目し、その数を減らす取り組みを行っている。我々の調査によると、学生が出席不良に至る理由は主に3つ挙げることができる。

- 1) 「修学上の障がいがあり、かつ学生支援課への相談ができない」ので授業についていけない、通学が面倒になる。
- 2) 「対人関係で大学生活そのものに困難を抱えている」ので大学が面白くない、行きたくない。
- 3) 「中学からの英語の積み上げ学習ができていない」ので授業がほとんど理解できない。

ただしこのような学生が必ずしも学力が著しく劣っているわけでもないのに、せっかく入学した大学で出席不良が原因で留年や休学に追い込まれるのは不幸である。よって我々が学生の幸せのためにも何らかの行動を起こさねばならないのは明らかである。そこで現在我々が取っている対応は以下の通りである。

1)の学生に対しては、授業担当者からのこまめな連絡、声かけによる個別対応、または対面授業内でのオンラインを併用したやり取りでの授業運営を行っている。

2)の学生に対しては、授業担当者による声掛けや座席の配慮などを行っている。

3)の学生に対しては、授業内でも学習を相談できる環境づくりと、個別に指導できる教材作成とその指導を行っている。

ただし、これらの対応は万全ではないし、担当教員の負担も大きいのが問題である。考えられる今後の対応としては「個人の環境に合った授業の仕組みを作る」ことであろう。例えば、

- A) 「各クラスの授業で、出席できなくなった時点で学生の学びを引き継げるオンデマンドクラスを設ける」
- B) 「Zoom 授業も併設し、担当教員とのやり取りができる時間も確保する」
- C) 「クラスを変更しても、単位取得が可能な仕組みを作る」などが挙げられる。

18歳人口が増々減少する中で、大学が多様な入試制度を用意し学生数を確保するのであれば、様々な「特性」を持った学生を迎え入れることになるのは当然である。であれば、我々教員が学生の留年や休学を本人の努力のみに帰するのではなく、迎え入れる側も様々な取り組みによって個々の学生の学びを継続できるサポート体制を作り、留年や休学に至る学生を減らす努力も必要であろう。そうすることで大学と学生の両方の幸せをカタチにできると信じている。